もしベル君にもう一人の祖父がいたら？

山吹色の大妖精

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通りの話で、もしベル君にもう一柱の祖父がいて、その神がオーディンだったら。

←修正版出しました。

ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／２５９２３６／

目　次

白髪で赤目の少年 ―― 1
もう一柱の祖父、その名はオーディン ―― 5
豊穣の女主人 ―― 8
神の宴 ―― 12
怪物祭（＋お知らせ） ―― 15
神の刃 ―― 19
ロキ・ファミリアとの共闘 ―― 23
同盟 ―― 27
新しい防具 ―― 30
路地裏にて ―― 33

白髪で赤目の少年

迷宮都市オラリオに白髪赤目の兎を思わせる少年がいた。少年は冒険者になるためにファミリアに加入しなければならないが、その小さな見た目故に弱々しいと見た目で判断されて、何処も門前払いされている。ロキ・ファミリアにも行ったが怪しい者とみなされて此方も門前払いを受けている。

「ハァ・・・コレで２０連敗・・・」

「へい！そこの君！」

「はい？何でしょうか？」

落ち込んでいる少年に声を掛ける一人の少女・・・ではなく女神は現在、自身のファミリアの勧誘をしていて、ここまで全敗である。

「僕のファミリアに入らないかい？」

「良いんですか!?お願いします！」

「やったぁ！これで一人目だぁ！」

片方はファミリアに入れること、もう片方は眷属が一人目であることにお互いが喜びの声を上げた。

「僕の名前はヘスティア、竈の女神のヘスティアだよ！」

「僕はベル・クラネルです。よろしくお願いします、神様！」

「さぁ！僕達のホームへ行こう！」

「はい！」

お互いの自己紹介が終わった後はヘスティア・ファミリアのホームへ向かった。

ヘスティア・ファミリアのホームの廃教会にて

「それじゃあ、早速恩恵を与えようか！」

「お願いします！神様！」

ベル・クラネル

Ｌｖ．１

力：Ｉ０
耐久：Ｉ０
器用：Ｉ０
敏捷：Ｉ０
魔力：Ｉ０
《魔法》
【ブロンテ】
・付与魔法
・雷属性
【ルーン文字】
・文字魔法
・刻まれる文字の意味によって効果変動
《スキル》

「フッ！」
「グぎゃあ！」
恩恵が刻まれて数日、ベルはゴブリンを倒しながらダンジョンの５階層に来ていた。ベルは発現した二つの魔法を駆使して戦い、ナイフをメインに戦っている。その時、ダンジョンの奥のほうから大きな気配がする。地鳴りと共に現れたのは牛の頭を持ったモンスターのミノタウロスである。
「ぶもぉぉ！」
「ミノタウロス!?ここには出ないはずじゃ!?」
「ぶぅ！」
「うわぁ！」
ミノタウロスはベルに向けて拳を振り下ろし、それを間一髪で避けたベルは懐から一つ目の魔法で刻んだ石を取り出してミノタウロスに投げた。
「ぶもぉ!?」
投げた石は爆発してミノタウロスにダメージを与えたが、かすり傷

程度しか与えていなかった。それを確認したベルはもう一つの魔法を唱えた。
「【ブロンテ(纏え)】」
ベルのナイフに雷を纏わせミノタウロスに向かって走る。ミノタウロスは身構えるも、ベルはもう一度爆発する石を爆発させてミノタウロスの視界を封じた。
「ヤァ！」
ベルの狙いは魔石。傷さえつければ良いので、雷を纏ったナイフを胸に目掛けて突き出すが
「ぶぅ！」
「ガァ！」
ミノタウロスに叩き落とされた。生きているのはベル自身のステータスに補正をかけることができｒ【ルーン文字】のお陰だろう。しかし、動けないベルはこのまま潰されるだろうと目を瞑るも
『ベル』
「！」
幼い頃大好きだった母の声を思い出したベルは立ち上がり、ナイフを構えて突撃する瞬間、ミノタウロスの体に銀色の線が入った。
「え？」
ミノタウロスはバラバラになり灰となった。情け無い声を出しながら倒れて上を見上げると、金色の髪を持った美女が立っていた。その姿を捉えるも身体的疲労とダメージが相まってベルは気絶してしまった。

ロキ・ファミリア所属のアイズ・ヴァレンシュタインは5階層で駆け出しの冒険者がミノタウロスに立ち向かっているのを見て驚いた。身に纏っている防具や手に持ってる武器はギルドから支給されるものなので駆け出しの冒険者だとわかった。少年が懐から出した石を爆発させながら雷を纏った槍で貫こうする光景に目を見開くも叩き落とされそのまま殺されそうなので助けたが、何故戦おうとしたのか

はわからなかった。少年はそのまま気絶したので一度この少年をギルドに送り届けようと一足先に向かっているとギルドの職員に出会った。
「ヴァレンシュタイン氏？・・・ベル君!?」
「知り合い？」
「はい、担当です」
事情を話ながら少年を彼女に渡すと、アイズはその白い髪を撫でながらその名前を噛み締めた。
「ベル・・・」
名前を覚えたアイズは自身のファミリアの元へ戻って行った。

もう一柱の祖父、その名はオーディン

『ベル』

―あぁ、これは夢だ―

ベルは目の前の光景が夢だとわかったのは死んでしまった筈の義母がいるからだ。幼い頃、ベルは義母とおじと祖父の四人で暮らしていて、祖父がかつてオラリオに君臨していたゼウスだということはわかっていた。義母は自分を抱きしめてくれるがこれが現実ではないということも知っているので心が痛くなる。景色が一転して視界に映ったのは二人目の祖父だ。祖父との出会いは義母と叔父がいなくなって途方に暮れている時に声をかけられて名前を聞けば

『オーディン、神だ』

神様だったので急いで謝った、だけど許して寄り添ってくれた。ゼウスおじいちゃんの知り合いのようで、おじいちゃんのもとに連れて行くとおじいちゃんはとても驚いていた。話し合った後、オーディンはここに住むことになった。その日からベルはオーディンおじいちゃんと呼び、もう一柱の祖父にはゼウスおじいちゃんと呼ぶことになった。祖父達との生活は新しくて楽しかった。ゼウスは英雄譚やハーレムのことや、オーディンは槍の使い方やルーン文字というものを教えてくれた。二柱共大好きだった。そして、夢が醒める。

「・・・知らない天井」

テンプレのような起き方をしたベルは頭の中で情報整理を始める。すると、部屋の扉が開いてハーフエルフのエイナが入ってきた。エイナはベルのアドバイザーで休憩時間にベルの様子を見に来ていた。

「ベル君、起きたんだね」

「エイナさん、すいません・・・こんな事になって」

ベルは本来なら逃げるのにミノタウロスと戦った事を思い出して謝った。

「反省してるならいいけど、これからは無茶しちゃダメだよ」

「はい・・・」

冒険者は冒険してはいけないとエイナに説教されながら反省した。

ふとベルはミノタウロスから助けて貰った金髪の少女を思い出した。
「そういえば、僕を助けてくれた金髪の女の人って誰なんですか？」
「ベル君知らなかったの？アイズ・ヴァレンシュタイン、ロキ・ファミリアの冒険者だよ」
「ロキ・ファミリア・・・」
ベルはロキ・ファミリアの名前を聞いて、かつて祖父のオーディンとゼウスからロキに手紙を渡して欲しいと言われ、手紙を預かっているのを思い出した。そして今度会ったら、お礼と共に手紙を渡そうと決めた。そして、これから強くならないといけないと思いながら、エイナから解放されたベルはホームに帰って行った。
「ただいま戻りました。神様」
「お帰りベル君！今日は遅かったね？」
「ちょっと事情がありまして、ステータスの更新をしながら話します」
「そうかい？なら早速更新しよっか！」
そう言いながらベッドで横になるベルにヘスティアは自身の血を流した。そして絶句した。
ベル・クラネル
Ｌｖ．１
力：Ｉ７７→Ｉ８２
耐久：Ｉ１３→Ｉ５２
器用：Ｉ９３→Ｉ９６
敏捷：Ｈ１４８→Ｈ１７２
魔力：Ｉ８５→Ｉ９９
《魔法》
【ブロンテ】
・付与魔法
・雷属性
【ルーン文字】
・文字魔法
・刻まれる文字の意味によって効果変動
《スキル》

【向上一途（リアリス・フレーゼ）」
・早熟する
・向上心が続く限り効果持続
・向上心の丈により効果向上
ヘスティアは絶句した。スキルが発現したのだ。この前の魔法が二つ発現した事にも驚いたが、帰りが遅くなった理由を聞いた。
「ミノタウロスと戦ったぁ!?」
「はい、そしてロキ・ファミリアのアイズ・ヴァレンシュタインさんに助けてもらいました」
「うむむ、ロキのところにかぁ」
ヘスティアはロキとは余り仲が良くない。けど己の眷属を助けてくれたことに微妙な顔をしていた。
「はい、更新終わったよ」
「ありがとうございます。ん？神様、スキルの欄に塗りつぶした後がありますがコレは？」
「あぁ、それは手元が狂ったんだよ。さぁ！晩御飯にしよっか！」
「わかりました、それでは準備してきます」
ステータスの書かれた羊紙を渡すヘスティアはそう誤魔化しながら晩御飯の提案するとベルもそれに承諾して台所に向かって行った。ヘスティアはそれを見ると溜息を吐きながらもう一枚のステータスが書かれた羊紙を見た。
（向上一途・・・成長を促進するスキル。魔法二つもそうだけどバレたら確実に神々の玩具にされる・・・外に漏れないように気を付けよう）
ヘスティアはそう思いながらベルのつくる晩御飯を待った。

豊穣の女主人

ベルは昨日のエイナからの注意を蔑ろにしてしまった結果散々な目に合ったので、今日は3、4階層で魔石を稼ごうと決めていた。そんな考え事をするベルに声をかける少女がいた。

「あの・・・」

「ん?」

「これ、落としましたよ」

少女の手に持っていたのは魔石だった。ベルは昨日、魔石を全て換金した筈なのに落としていたことを疑問に思っていた。しかし、相手の好意を無駄に出来ず受け取った。

「ありがとうございます。僕はベル・クラネル。貴女は?」

「シル・フローヴァです。あの、よかったらこれをどうぞ」

シルは包みを取り出してベルに差し出す。良い匂いがするから食べ物だとわかった。

「えぇ!?そんな、悪いですよ!それにこれって、貴女の朝ご飯じゃあ・・・」

「このまま見過ごしてしまうと、私の良心が痛んでしまいそうなんです。だからベルさん、どうか受け取ってくれませんか?」

「ず、ずるいっ・・・けど、そこまでしてくれるなら、何かお返しをさせてください」

「良いんですか?それじゃあ、私の働いている酒場に来てくれませんか?豊穣の女主人って言うんです」

「わかりました。それじゃあ夜に伺います」

こうしてベルは夜にシルが働いている豊穣の女主人に行くことになった。

ベルが一日分の稼ぎと酒場で食べる分を稼いだベルはダンジョン攻略を切り上げ、ホームに戻って更新した後は、豊穣の女主人に来ていた。ベルが扉を開くと、あの時のウェイトレスのシルがいた。

「ベルさん！来てくれたんですね！」
「はい、約束しましたから」
「おや、アンタがシルが言っていた客かい？ははっ、冒険者のくせに可愛い顔してるねぇ！」
（ほっとけよ）
「何でもアタシ達に悲鳴を上げさせるほど大食漢なんだそうじゃないか！　じゃんじゃん料理を出すから、じゃんじゃん金を使ってってくれよぉ！」
「ええ⁉」
　驚いたベルはシルに目を向けると、シルはさっと目を逸らした。
「ちょっと！いつから僕が大食漢になったんですか⁉」
「・・・テヘヘ」
「テヘヘじゃないです⁉」
　そう言いながらメニューを手に取りパスタを注文するベル。
「楽しんでいますか？」
「圧倒されています・・・」
　そんな会話をしていると、茶髪の猫人（キャットピープル）のウェイトレスが大きな声で団体の客を案内していた。入ってきたファミリアの名前はロキ・ファミリア。あの時、ベルを助けたアイズ・ヴァレンシュタインもいる。あの集団がロキ・ファミリアだとわかるとベルは祖父達から預かっている手紙を渡そうと懐に仕舞っていた手紙を出していると、狼人（ウェアウルフ）の団員が周りの団員に聞かせるように叫んだ。
「そうだ、アイズ！お前のあの話を聞かせてやれよ！」
「あの話？」
「５階層にいたミノタウロスに挑んだ命知らずの雑魚のことだよ！」
『５階層でミノタウロスに挑んだ』自分の事だとわかったベルは固まってしまい、そのまま狼人の話を聞いていた。時には緑髪のエルフが注意していたが、狼人は黙らず話続けてベルが震えていると
「ベルはこれから強くなるよ」
　金髪の少女、アイズ・ヴァレンシュタインが言った。アイズの言葉に固まったり口に含んでいた酒を吹き出して驚愕するロキ・ファミリ

アの団員と主神。
「あ、アイズたん？その子と知り合いなん？」
「違う、担当のアドバイザーから聞いた」
「そうなんか・・・どんな子なん？」
「白い髪で目が赤い・・・兎みたいな子だった・・・あの子みたいに・・・あ」
「あ・・・」
　偶々目が合ってしまったベルとアイズ、これを機にして手紙を渡しておこうと先にシルに会計を済ませてロキ・ファミリアに近づき自己紹介をする。
「はじめまして、ロキ・ファミリアのみなさん、僕はベル・クラネル。ロキ様、貴方に手紙があります」
「ん？うちに？誰から？」
「オーディンおじいちゃんとゼウスおじいちゃんです」
「「「!?」」」
　小さな声で伝えるとロキ・ファミリアの主神と幹部が目を見開き驚愕した。ベルはロキに祖父達の手紙を差し出した後はアイズの方に向いて感謝の意を述べた。
「あの時助けてくれてありがとうございます。ヴァレンシュタインさん」
「ううん、気にしなくて良いよ」
「ちょっと待ってくれへんか!?オーディン!?オーディンって言うたんか!?しかもおじいちゃん!?」
「すまない、ベル・クラネル。少し話を聞きたいんだが」
「それは出来ないです」
「どうしてかな？」
「さっきそこの狼人のお兄さんが言っていた命知らずの雑魚とは僕のことです。今の僕の気持ちは穏やかではなくて・・・また今度でお願いします」
「ッ・・・それは済まなかった。彼には充分に言いつけておくよ。機会があれば僕たちのホームに来てくれないか？」

「わかりました。それではまた・・・」
　肩を震わせながら豊穣の女主じんから出るベル。それを見届けるロキ・ファミリア。自分達の失態で起こった事件を酒の肴にした結果、とんでもない事になったのではと思ってしまうロキ・ファミリアの団員達。この後にベルは6階層まで防具なしと護身用のナイフだけで潜って帰る頃には日の出になっていた。ヘスティアに再会したベルはこう言った。
「神様、僕、強くなりたいです」

神の宴

『豊穣の女主人』の宴会が終わって、ロキ・ファミリアの本拠地である黄昏の館の会議室に主神ロキや団長のフィン・ディムナなどの幹部が揃っている。会議の話題は『豊穣の女主人』にいた白髪で赤目の少年ベル・クラネルについてである。ベルから受け取った二柱の神の手紙を読んだ全員はこれからベルをどうするべきかを話し合っていたが、フィンはロキにオーディンについて質問した。

「ロキ、ベル・クラネルが言っていた神ゼウスと神オーディンについてだが、神ゼウスは兎も角、神オーディンとはどういう関係なんだい？」

「オーディンは天界でゼウスとは別に神々をまとめていた大神やそこにはウチやフレイヤも入っているんやが、まさかこっちに降りているなんて思ってなかったわ・・・」

ロキはオーディンの天界時代の話を掻い摘んで話していた。ロキとしては天界時代に暴れたせいでオーディンに迷惑を掛けまくったことは絶対に話たくなかったが、気まずそうにしてるロキを見た三幹部には直ぐに見抜かれた。

「問題はベル・クラネルに何処のファミリアなのかを聞けなかったことだね」

「ゼウスなら兎も角、オーディンに言われたからにはやらんとなぁ」

二柱の手紙の内容として共通することは『ベルを頼む』ということである。次に出会ったらこの前の謝罪をする為にも、明日には『神の宴』があるのでロキはベル・クラネルの所属するファミリアを探ろうとしているが、最近、ヘスティアに眷属が出来たと聞いて会ったら揶揄うついでに聞いておこうと決心した。

後日、アイアム・ガネーシャにて『神の宴』が開催されていた。ヘスティアは自身の眷属であるベルの力になるべく、とある神物を探していた。が、その前に持参しているタッパーに料理を詰め込んでいた。その様を見た紅い髪の女神がヘスティアに近づいた。

「何やってんのよ、アンタ」
「むっ・・・ヘファイストスじゃないか！」
「久しぶりヘスティア。元気そうで何よりよ・・・」
「良かった。やっぱり来たんだね。ここにきて正解だったよ」
「何よ、言っとくけどお金はもう一ヴァリスも貸さないからね」
「し、失敬な！」
　そんな風に会話を続けていると、一柱の女神が二柱に近づいて来た。
「ふふ、相変わらず仲が良いのね」
「ふ、フレイヤ・・・」
　やって来たのは美の神フレイヤ。オラリオに君臨する二大ファミリアの片方の主神である。
「うぅ・・・ボクは君のこと、苦手なんだ」
「うふふ、貴方のそういうところ、私は好きよ？」
「おーい！ファイたーん、フレイヤー、ドチビー！」
　そこに更なる乱入者が現れる。神ロキである。ロキはそのまま会話に混ざると、ヘスティアに問いかける。
「ドチビ、この前自分ところに眷属が出来たそうではないか」
「ん？ベル君のことかい？」
　ベルの名前が出た瞬間、ロキとフレイヤの雰囲気が僅かに変わった。ロキはドンピシャだと思いながら更に問いかけた。
「ちょっと用があるからウチのホームに連れて来て欲しいんや」
「君がベル君に用？何で急に・・・」
「あら、ロキがヘスティアの子供を気にするだなんて、どんな子なのかしら」
　ヘスティアはロキの言葉を怪しみ、ヘファイストスは意外そうな表情を浮かべ、フレイヤは探るように問いかけた。
「そうだね、ベル君はボクにはもったいないくらいに良い子だぜ！」
　そう言いながら自分のことのように胸を張るヘスティア。それを忌々しそうに見つめるロキはさっきの話を流さないように掘り返した。

「兎に角、怪物（モンスター・フィリア）祭の後くらいにはベルをウチのホームに連れて来いよ？」
「むー・・・わかった。ベル君に言っておくよ」
「じゃあ、私も失礼させてもらうわ。確認したいことは聞けたし」
そう言いながら去って行く二柱の神、話が終わったヘスティアは本来の目的を思い出して、ヘファイストスの方に向いた。
「あら、次は何かしら？」
「実はヘファイストスに頼み事があって・・・ベル君に武器を作って欲しいんだ！」

怪物祭（＋お知らせ）

ヘスティアがヘファイストスに頼み事をしている一方、ベルはダンジョンで自身の魔法の応用を試していた。ベルの魔法は両方とも拡張性が高く、主に【ルーン文字】は無限の可能性を秘めいている。そこでベルは【ルーン文字】を使って様々な実験を行なっていた。例えば、僅かなお小遣いで買ったゴーグルで魔石の位置を透視するマジックアイテムを作ってみたら成功した。ゴーグルをかけてモンスターを見るだけで魔石の位置を特定することができて、そこを的確にナイフで突くことであっという間に倒せた。

【ルーン文字】は書かれる文字の意味によって効果が変動する魔法。空中でなぞっても発動するが、書かれた物は擬似的な付与（エンチャント）だけで無くマジックアイテムを作ることも出来る。神々が知ればチートと叫ぶだろうし、発展アビリティの【神秘】も無しにマジックアイテムを作れるのでヘルメス・ファミリアの団長である【万能者（ペルセウス）】は涙目である。

（・・・ん？アレは）

そんな中、ベルは実験の途中で檻に入れられたモンスターが運ばれているのを見た。近くにはエイナなどのギルドの職員がいる。

「今年もやるのか、アレ」

「怪物（モンスター・フィリア）祭ねぇ・・・」

（怪物祭？）

周りの冒険者達の言葉に耳を傾けていたベルは怪物祭という単語に首を傾げた。エイナに聞くにしても仕事中だから気が引けるし、他の冒険者に聞いたら世間知らずと笑われそうなので聞くのをやめた。そしてベルは実験をやめて、ダンジョンから出てホームに帰った。

ヘスティアが出かけてから三日、未だヘスティアは帰って来ない。心配するベルは今日もダンジョンで実験をしようとホームから出かけた。ベルは西のメインストリートで歩いていると、豊穣の女主人で働いている茶髪の猫人がベルに声をかけた。

「おーい！待つニャそこの白髪頭！」

白髪頭という単語に驚いたベルは足を止めて猫人に振り返る。
「ちょっと面倒ニャことを頼みたいニャ。はい、コレ」
「へっ？」
「白髪頭はシルのマブダチニャ。だからコレをあのおっちょこちょいに渡してほしいニャ」
言ってることがわからないベルは困惑していると
「アーニャ。それでは説明不足です。クラネルさんも困っています」
「リューはアホニャ。店番サボって祭りを見に行ったシルに、忘れていった財布を届けて欲しいニャんて、そんなこと話さずともわかるニャ」
「というわけです。言葉足らずで申し訳ありませんでした」
「・・・怪物祭？」
「初耳ですか？この都市に身を置く者なら知らないということはない筈ですが」
「実は、オラリオに来たのはつい最近で・・・良かったら教えてくれませんか？」
ベルは怪物祭について知らないので二人に聞くと、アーニャから教えてもらった。なんでも、ダンジョンから持ってきたモンスターを調教するらしい。怪物祭について教えてもらったベルはシルに財布を届ける話を受けることにした。

「よぉー、待たせたか？」
「いえ、少し前に来たばかり」
とある店にて女神フレイヤのもとに一柱の神と一人の人間が来た。
「ところで、いつになったらその子を紹介してくれるのかしら？」
「なんや、紹介いるんか」
「一応、彼女と私は初対面よ」
「んじゃ、ウチのアイズや。コレで十分やろ。アイズ、こんなやつでも神やから、挨拶だけはしとき」
「・・・・・・初めまして」

ロキがアイズに促して挨拶すると、早速ロキは話題を変えた。
「素直に聞く。何をやらかす気や」
「何を言ってるのかしら、ロキ」
「とぼけんな、あほぅ。最近動き過ぎやろう、自分。興味ないとかほざいておった宴に顔を出すわ、さっきの口振りからして情報収集に余念がないわ、今度は何を企んどる」
「企むだなんて人聞きが悪いわよ?」
「じゃかあしいわ。……お前が妙な真似をするとロクなことが起きひん。こっちに面倒が及ぶようなら……潰すぞ」
そんな言葉の応酬を続けて無言になると、ロキは大きな溜息を吐いた。
「つまりどこぞのファミリアの子供を気に入ったわけか」
女神フレイヤの男癖の悪さは、神々の中では周知の事実だ。気に入った下界の子供達を見つければ、その類ない『美』を用いて自分のモノにする。魔性ともいえる彼女の『美』にとりつかれ虜となった者は数しれない。
「ったく、この色ボケ女神が。年がら年中盛りおって、誰だろうがお構いなしか」
「あら心外ね。分別くらいあるわ」
「抜かせ、男神どもも誑かしとるくせに」
「彼等との繋がりは色々と便利よ?何かと融通も利くし」
「・・・で?どんなヤツや、今度自分の目にとまった子供ってのは?いつ見つけた?」
ロキは教えろ、と口端を吊り上げる。それくらい言えと要求している彼女は言うまで帰さないと、興味深々にしている。
「・・・強くないわ、少しのことで傷ついてしまい、簡単に泣いてしまう・・・そんな子。でも、綺麗だった。透き通っていた。あの子は私が今まで見たことのない色をしていたわ。見つけたのは本当に偶然。たまたま視界に入っただけ」
フレイヤは当時の情景を思い出しながら言葉を重ねていると、フレイヤの動きが止まった。

「ごめんなさい、急用ができたわ」
「はぁっ？」
「また今度会いましょう」
「あぁ、そうや」
　ぽかんとするロキを置いてフレイヤは出ていこうとすると、ロキは思い出したように喋った。
「オーディンが下界に降りて来たで」
「！」
「まだオラリオには来てないらしいけど、彼奴からの手紙が来たで。見るか？」
「・・・いえ、今はやめておくわ」
　手紙を見せつけているロキに対して辞退するフレイヤはそのまま店から出た。
「こっちも早くあの小僧を見つけんとなぁ、アイズたん」
「うん」
　ロキとしてはベル・クラネルがフレイヤが気に入った男ではないと思いたいが、嫌な予感がしていた。

神の刃

「はい、これ。ご要望には応えられたかしら？」
「おぉ！うんうん、十分だよ！文句なんてあるわけないない！」
　ヘスティアはヘファイストスから受け取った箱の中身を見て満足する。中にはベルの武器である黒いナイフが入ってある。
「言っておくけど、ローン、踏み倒すんじゃないわよ」
「わかってる！わかってる！」
　ヘスティアはそう言いながら早速ここを出る準備をしている。
「もう行くの？」
「ああ、悪いけど！」
「ヘスティア！あんた少しは休みなさいよ！」
　ヘファイストスの忠告を背中で聞き、そのまま振り返らずに手を振った。

「シルさん、何処にいるんだろう・・・？」
　ベルは現在、シルに財布を届ける為に彼女を探している。しかし、人波に埋もれて前に進むのに四苦八苦していると
「ベールくーんっ！」
「神様!?どうしてここに!?」
「おいおい、馬鹿な言うなよ、君に会いたかったからに決まってるじゃないか！」
「いえ、僕も会いたかったですけど、そういうことじゃなくて・・・今日まで一体どちらに？」
　三日もホームに帰って来なかったヘスティアがやって来た。ベルはヘスティアの答えになってない答えに困惑している。
「か、神様？すごいご機嫌みたいですけど、本当に何があったんですか？」
「知りたいかい？」
「は、はい」

「・・・うん、折角だ。やっぱり今は教えなーい。楽しみは後で取っておくとしよう」
「えぇ!?」
「そんなことよりベル君、デートしようぜ！」
「で、デート!?」
「ふふっさぁ行くぞ！ベル君！」
　手を繋ぐヘスティアにベルはさらに困惑する。それと、リュー達からの頼みを達成しないといけないので、ベルは急いでヘスティアに話しかけた。
「ま、待ってください神様！僕、実はお使いを頼まれているんです！」
「ん？そうなのかい？」
「はい、だから今もある人を探している途中で・・・」
「よし、じゃあ、デートしながら人探しをしようじゃないか」
　そんなことを言いながら、屋台のおじさんにクレープを二つ頼むヘスティア。時には食べさせ合いをしながら進んでいった。

　とある場所にて、フレイヤは捕らえられたモンスター達の前を歩いている。
「・・・貴方がいいわ。出てきなさい」
　フレイヤは一体のモンスターの檻の鍵を解いてモンスターを出した。
「さあ、小さな女神(わたし)を追いかけて？」
　解き放たれたモンスターは女神の命令を受けて飛び出した。

　あの後、ベル達は担当のエイナと出会い、ヘスティアはエイナと何かを話して戻ってくる。ヘスティアはベルに探し人のことを聞いて、ベルの周りには沢山の女の子がいると思っていると
「モ、モンスターだぁあああああ!?」
　悲鳴が聞こえた。奥から現れるのは純白の毛並みを持つモンス

ター。シルバーバックであった。ヘスティアを見たシルバーバックはヘスティアに向かって大きく前に踏み出した。
「っ・・・ベル君!?」
ベルは咄嗟にヘスティアを抱き抱えて逃走する。シルバーバックはそれについて行く。それを見たベルは驚き
「どうして神様が狙われてるんですか!?」
「知るもんか!?あんなモンスターは初対面だ!ボクは何もしちゃいない!」
そんな話をしながら走っているベルはとある場所に着いた。
「ダイダロス通り・・・!?」
「アアアアアア!!」
「っ!?」
ベルは入ろうか悩んだが、後ろにモンスターが現れたので迷わず突入した。しかし、相手は猿のモンスター。上から急襲を受けてヘスティアと一緒に倒れてしまう。そして倒れたベルの目の前に一個の箱が目に入った。ベルは急いで箱を開けると、黒いナイフが入っていた。
「コレは・・・」
「それはヘスティア(神)・ナイフ(刃)。ヘファイストスに頼んで作ってもらった君の武器だ!」
「僕の武器・・・!」
「グガァァァァ!」
「っ!」
「ガァ!?」
ベルは迫ってくるシルバーバックに斬りつけるとダメージが高かったのか、モンスターが怯んだ。モンスターが怯んだ隙にベルはもう一度ヘスティアを抱えて走り出す。ベルは狭いところに着くと服を脱いでヘスティアに声をかけた。
「神様!ステータスを更新してください!アイツは、僕がやります!」
「っ!、わかった!」
ヘスティアも懐から針を出して己の指に刺して血を出してベルの

背中に垂らした。
ベル・クラネル
Ｌｖ．１
力：Ｇ２２１→Ｅ４０３
耐久：Ｈ１０１→Ｈ１９９
器用：Ｇ２３２→Ｅ４１２
敏捷：Ｆ３１３→Ｄ５２１
魔力：Ｉ９９→Ｅ４９９
《魔法》
【ブロンテ】
・付与魔法
・雷属性
【ルーン文字】
・文字魔法
・刻まれる文字の意味によって効果変動
《スキル》
【向上一途（リアリス・フレーゼ）】
・早熟する
・向上心が続く限り効果持続
・向上心の丈により効果向上
「ベル君」
「はい」
「さぁ、行くんだ！」
少年の戦いがはじま

ロキ・ファミリアとの共闘

ヘスティアに見送られたベルは左手に【ルーン文字】を書きながらシルバーバックの前に現れた。シルバーバックはヘスティアを今も探しており、何処に隠したかをベルに目で訴えている。

「【ブロンテ(纏え)】！」

「ガァァァ！」

ベルはヘスティア・ナイフに雷を纏わせ、シルバーバックに突撃する。シルバーバックは腕を振りかぶり腕についた鎖で迎撃するも

「【アイギス】！」

「ガァァ!?」

ベルは前もって手のひらに書いておいた【ルーン文字】を発動した。効果は『結界を張る』。シルバーバックの鎖は【アイギス】に阻まれ、ベルのナイフはそのままシルバーバックの胸に刺さり、魔石に傷をつけたのか灰になって消えた。

「・・・勝った」

その瞬間に周りから歓喜の声が上がった。ヘスティアはベルのもとに走ってベルを抱きしめた。

「やったね！ベル君！」

「はい！けど、まだ他にもモンスターが・・・」

「え？」

ベルはゴーグルをかけながら言う。ベルは透視の効果を持つゴーグルを通して見たこともない蛇でようなのモンスターが暴れている光景を見た。

「神様！僕、行ってきます！」

「あ、おい！ベル君!?」

ベルは野次馬を飛び越え、件のモンスターが暴れている場所へ向かった。

ロキ・ファミリアの魔術師のレフィーヤ・ウィリディスは絶対絶命

のピンチに陥っていた。蛇のような新種のモンスターに自身の魔法をぶつけようと、詠唱していたらモンスターがいきなりこっちを向いて攻撃してきた。腹部に触手が刺さり、モンスターの姿が変形して花の形になるとこちらに近づいてきた。このままレフィーヤを食べるつもりだ。レフィーヤは動けず、仲間のアマゾネスも近づけない。

（あ、死ぬ）

レフィーヤはそう思った時、食人花に金色と銀色の線が入った。アイズが食人花の頭を断ち切った。レフィーヤは憧憬の相手にまた助けられたのだ。しかし事態は更に続く。

「ちょ、ちょっと、まだ来るの!?」

その瞬間、さっきの食人花が三体もあらわれた。アイズ達は応戦するも、アイズが使っている剣が折れてしまう。すると、そこに新たな乱入者が現れた。

「大丈夫ですか!?」

「貴方は・・・？」

「アイズ、あの子って・・・」

「うん、ベル・クラネル」

ベルはレフィーヤのもとに走り、腹部の傷を見て早速【ルーン文字】を行使する。傷口の近くで指が空中をなぞり、文字は緑色の光になって傷を治した。

「傷が・・・これなら！」

「待ってください！」

レフィーヤは傷が治ったことに驚くが直ぐに参戦しようとするも、ベルに止められる。

「っ・・・な、なんですか」

「アイツは恐らく魔力の高いほうに反応して襲う敵です。だからこのままお姉さんが詠唱しても、また襲われます」

「!?、それじゃあどうすれば・・・」

「僕に任せてください！」

ベルはそう言うと、今度は左手から腕に【ルーン文字】を書いた。レフィーヤはそれを見て疑問に思う。

「何をする気ですか？」
「結界を張ってお姉さんの魔力を隠蔽します」
「え？」
　ベルの【ルーン文字】は効果を自由自在にすることが出来る。シルバーバックの時は盾の場合もあるが今回は『結界をドーム状に張って魔力を隠蔽する』という工夫をしている。
「よし、出来た。お姉さん、僕が結界を張ってから一番強い魔法の詠唱をお願いします」
「な!?、命令しないでください！それと私の名前はレフィーヤ・ウィリディスです！神ロキに恩恵を授かった、ウィーシェの森のエルフです！」
「わかりました。それじゃあお願いします！レフィーヤさん！【アイギス】展開！」
【ウィーシェの名のもとに願う。森の先人よ、誇り高き同胞よ。我が声に応じ草原へと来れ。繋ぐ絆、楽宴の契り。円環を廻し舞い踊れ。至れ、妖精の輪。どうか、力を貸し与えて欲しい】【エルフ・リング】！」
　レフィーヤの詠唱の魔力がベルの結界によって隠蔽されて食人花達は気づかない。アイズ達は気づいているので、そのまま食人花達に時間稼ぎを続ける。
【終末の前触れよ、白き雪よ。黄昏を前に風を巻け。閉ざされる光、凍てつく大地。吹雪け三度の厳冬。我が名はアールヴ】行きます！」
「【アイギス】解除！」
「【ウィン・フィンブルヴェトル】！」
　レフィーヤの師の魔法が食人花達に炸裂し、纏めて氷像となった。その瞬間にアイズとアマゾネスの姉妹は一斉攻撃を仕掛けて砕け散った。
「ふぅ・・・っ！」
「危ない！」
　ベルは精神疲弊（マインド・ダウン）によって倒れそうなところをレフィーヤが支え、残りの三人はベル達に近づき、次にロキとヘスティアがやってきた。

「ベル君！ベル君っ！」
「あほぉ、精神疲弊で気絶してるだけや。取り敢えず、ウチのホームに連れて行くで」
「ベル君に何をするつもり？」
「違うわ、この子はウチの子の恩人やから助けることと、宴の時の話をやるんや」
「そういえばそうだったね、わかったよ」
「忘れてたんか・・・！」
ヘスティア達は気絶したベルを連れてロキ・ファミリアのホームである黄昏の館に向かった。
怪物祭の騒動はこれで終了した。

同盟

「んぅ・・・ここは？」
　怪物祭の騒動が終わってから数時間後、精神疲弊で気絶していたベルが目を覚ました。外を見ると既に夕方になっている。次に横を見れば、ヘスティアがベルのベッドで突っ伏して寝ている。
「神様、神様！」
「うーん・・・ベル君!?起きたんだね！」
　ベルがヘスティアを起こすと、ヘスティアはベルに抱きついた。その大きな音が聞こえたのか部屋の扉が開かれる。
「起きましたか？・・・・あ」
「あ」
「・・・失礼しました」
「ち、違うんです！」
　部屋に入ってきた黒髪の青年はヘスティアが抱きついている光景に思わず部屋から出てしまう。それに焦ったのかベルはすぐに起き上がり、弁明しようと青年の後を追おうと部屋から出ると
「あ・・・」
　今度はアイズと遭遇する。そこでベルは自分は今何処にいるのかと考える。あのモンスターとの戦いの後に気絶したベルは現在地が何処なのか皆目検討がつかなくてパニック状態に陥っている。そんなベルにアイズは
「やっと起きたんだね、それじゃあ行こうか」
「行く？何処にですか？」
「会議室だけど？」
「はい？」

　アイズに連れられてロキ・ファミリアの会議室に来たベルとヘスティア。そこにいるのは主神のロキに勇者（ブレイバー）のフィン・ディムナ、九魔姫（ナイン・ヘル）のリヴェリア・リヨス・アールヴ、重傑（エルガナム）のガレス・ランドロッ

クの他にも、ベート・ローガ、ティオナ、ティオネのヒリュテ姉妹、レフィーヤ・ウィリディス、そしてアイズ・ヴァレンシュタイン。ロキ・ファミリアの幹部などが勢揃いである。そしてその光景を見ているベルの心境は

(どうしてこうなった)

「さて、今君は状況を把握してないようだが、説明は要るかな?」

「お、お願いします」

そしてフィンから語られたのは、豊穣の女主人での出来事や自分達の仲間を助けてくれた感謝があったが本題はここからだった。

「僕たちロキ・ファミリアは君たちヘスティア・ファミリアと同盟を組みたい」

「「同盟?」」

ベルとヘスティアは首を傾げた。何故に同盟?

「ドチビ、自分ベルがゼウスとオーディンの孫ってこと知らんとちゃうか?」

「ハァ!?ベル君がゼウスとオーディンの孫!?知らないよそんなこと!?」

オーディンは兎も角、ゼウスの孫ということがオラリオ中に知られたら大騒ぎになる。

「そもそもベルに渡された手紙に、ベルの面倒を見てほしいって過保護なことが書いてあったわ」

ロキは笑いながらベルから渡された手紙を見せつけた。そして今度は真面目な顔で話しかけた。

「ドチビんとこのファミリアは零細ファミリアでベルのレア魔法を他のファミリアに知られたら奪われるで。それに対してウチは大御所、簡単に手を出すやつはおらん」

「けど、良いんですか?こちらとしては有難いですけど」

「まぁ、オーディンの頼みやしな。返せる借りは返しておきたいし」

「それじゃあ、神様も良いですね?」

「ぐぬぬ、仕方ないなぁ!」

「よっし!それじゃあよろしくな!ベル!」

「はい、ロキ様」
ヘスティアの了承にロキは笑みを浮かべて、ベルに握手を求める。
ベルもそれに応えるためにロキの手を握った。

新しい防具

「みんな～、新しい団員じゃないけど、これから一緒に住む仲間を紹介するで！」
　ロキ・ファミリアのホームである『黄昏の館』でロキが大きな声をあげて注目を集めていた。側にはヘスティアとベルがいる。
「ヘスティア・ファミリアの主神のドチビと団長のベルや！」
「おい！そこは名前で呼ぶんじゃないのか！」
　ロキの紹介とともに抗議するヘスティア。ベルはぺこりとお辞儀をしている。アイズやベートは二人を見て驚いていると、レフィーヤは怪物祭の時のお礼を言おうと、ある物を手に持ってベルに近づいた。
「ベル・クラネル」
「レフィーヤさん？」
「あの時は・・・ありがとうございました」
「へ？」
「貴方がいなければ私は何も出来ないままでした。だから、これはそのお礼です」
　レフィーヤに渡されたのは水晶飴（クリスタル・ドロップ）だった。それを見たレフィーヤとは相部屋であるエルフィ・コレットは驚いた。
「えぇ!?レフィーヤ、もしかしてこの子のこと好きになったの？」
「なっ!?違います！これは怪物祭で助けてもらった時のお礼です！そういう意味ではありません！」
　エルフィの質問に対して頬を染めながら否定した。怪物祭で何が起こったのかは知らないが周りの団員はニヤニヤしている。
「ベル・クラネル！あなたも何か言いなさい！」
「え、えぇ!?う、うーん・・・し、失礼しました！」
「え!?ちょっとお!?何処に行くんですか!?待ちなさーい！」
　レフィーヤは助けを求めようと咄嗟にベルに何か言わせようと指示したが、ベルは何も言えず逃げるように食堂から逃げた。レフィーヤはベルを追ったので、これによって女性の団員は盛り上がった。

「なんで逃げたんですかぁ・・・」
「す、すみませぇん・・・」
「あれはベル君にウィリディス氏?どうしたの?」
「エイナさん?実は・・・」
『黄昏の館』からギルドに逃げたベルとレフィーヤ。エイナは何故ベルがロキ・ファミリアの団員と一緒にいるのか困惑している。それをベルが簡潔に説明した。事情を聞いたエイナは、
「ベル君、もうすぐあがるからちょっと待ってて、ウィリディス氏も一緒に」
「へ?わ、わかりました」
「ベル・クラネル、あのハーフエルフは?」
「僕の担当のエイナさんです」
ベルとレフィーヤはギルドのソファに座ってエイナをことを話しながら待っていると私服姿のエイナがやってきた。
「さっ、行こっか」
「え?行くって、何処にですか?」
「行けばわかるよ」
エイナについて行くベルとレフィーヤ、周りの男性の冒険者は美少女二人と一緒にいるベルを見て嫉妬の目線を飛ばしていた。その間にエイナ達は目的の場所に着いた。
「へ、ヘファイストス・ファミリア・・・?高級品なんじゃ?」
「大丈夫。新人鍛冶師の店もあるから」
エイナについて行くように入る二人は新人鍛冶師のエリアに入る。
「ウィリディス氏はベル君と一緒に防具を見に行ってください。私も少し見て回るから」
そう言いながらエイナは去っていった。置いて行かれた二人はというと
「・・・行きましょうか。ちょうどいいので、貴方の防具を探しましょう」

「あ、はい・・・」
　エイナに言われた通りに防具を探した。レフィーヤはベルの冒険するにあたって良いものを探そうと思った。すると、
「これは・・・？」
「それがどうかしましたか？」
　ベルの目に白いライトアーマーが入った。ライトアーマーは膝当てや腰部など、最低限の箇所が守られている。ベルの体にちょうど良いのでこれにしようと、作った人の名前を見た。
「ヴェルフ・クロッゾ・・・」
「クロッゾ？あの魔剣鍛冶師の貴族の防具が何故ここに・・・？」
　レフィーヤはクロッゾの名前を聞いて何故ここにあるのか疑問に思う。そこにエイナがやってきた。
「ベル君、決まった？」
「はい！これにします！」
　ベルはこの白いライトアーマーを気に入ったようなので防具が決まり、お会計した後には早速着替えていた。ベルの白い髪の毛がライトアーマーの色とマッチしているのでよく似合っている。
「ベル君、似合っているよ。後これも」
「これって・・・」
　そこでエイナはベルに緑色のプロテクターを渡した。
「良いんですか？」
「良いのよ、プレゼントってことで」
「ありがとうございます！大事に使いますね！」
　そうやってお礼を言われて嬉しそうにするエイナを見たレフィーヤは胸の中がモヤモヤしていた。

路地裏にて

「エイナさんから貰ったプロテクターは【アイギス】を仕込もうかな・・・」
「ベル・クラネル、貴方って人は・・・」
　エイナからプロテクターをもらったベルだが、早速買った防具に【ルーン文字】の改造を施そうと考えているベルに呆れているレフィーヤ、二人で『黄昏の館』に帰ろうとしている。
「うっ・・・」
「だ、大丈夫ですか？」
　その時、二人のもとに一人の少女が転がる。ベルは心配の声をかけると

「追いついたぞ！この糞パルゥムがっ！」
　一人の冒険者が剣を持って走ってきた。男は怒りのままに少女に向かって剣を振ってきたのでベルはすかさず手に書いてある【アイギス】を発動した。
「【アイギス】！」
「うお!?」
「こんな街中で何をやっているんです」
「うるせえ！邪魔をするなら、後ろのそいつごと叩き斬るぞ！」
「ま、待ってください！それ以上は、ロキ・ファミリアが許しません！」
「千の妖精（サウザンド・エルフ）!?ロキ・ファミリアだと!?くそがっ・・・！」
【アイギス】は男の剣を防ぐとベルは冷静に問いかけるが男は少女をベル諸共斬ろうとしたが、レフィーヤの存在に気づきこちらに分が悪いと思い悪態をつきながら去っていった。
「ありがとうございます。レフィーヤさん」
「いえ、ロキ・ファミリアの一員として当然のことをしたまでです」
「クラネルさん？それに同胞の方、何をなされているんですか？」
「あ、リューさん」
　男が去った後に現れたのは『豊穣の女主人』のリューだ。リューは

買い出しの途中に騒ぎを聞いてここまできたのだが、ベルはそれについての事情を話しているとレフィーヤは
（この人間（ヒューマン）、どれだけの女性と知り合っているんでしょう・・・）
　レフィーヤはベルの知人が女性しかいないじゃないかと思っていた。確かにベルはオラリオに来てから女性しか知り合っていない。強いて言うなら検問所にいたハシャーナという男ぐらいか。
「さっきの子は・・・？」
「あ、そういえば・・・居なくなってる」
「恐らくですが、混乱に乗じて逃げたのでしょう」
　ベル達はさっきまで倒れていた少女がいないことに気づいたが混乱に乗じて離脱したのだろうと思い再びそれぞれの帰路に帰った。
「お、帰ってきたんか、おかえりー」
「ただいまです」
「ほら、ベルも一緒に」
「た、ただいまです。ロキ様」
「なんや、もう仲良くなったんか？」
「そ、そんなんじゃありません！」
「まあ、もう夕食の時間やし食堂行こか」
『黄昏の館』に帰ってきた二人はロキに迎えられた。ロキは二人が早速仲が良くなってることに嬉しく思っている。そんな中みんなで食堂に行くとメイド服姿のヘスティアがいた。
「ベル君!?お、お帰り！」
「神様!?どうしてそんな格好に!?」
「ベル、それについてなんやけど」
　ロキから聞かされたのはヘスティアから貰ったナイフのことで、ヘスティアがヘファイストスに土下座してまで作ってもらったこのヘスティア・ナイフの値段はなんと二億。
「に、二億!?」
「ドチビはファイたんのもとで完済するまで働く筈なんやったけど、ウチが一括払いする代わりにその分をここで働いてもらうことにしたんや」

「ろ、ロキ様?どうしてそこまでしてくれるんですか?」
　レフィーヤは億単位の金額に驚愕し、ロキは説明を続けた。ベルはロキが何故そこまでしてくれるのかを聞くと
「それはドチビがウチのホームで働いてるのを見て笑ってやるからや!」
「笑うなあぁ!」
「おわっ!?何すんねんドチビ!」
「やーい!無乳!」
「なんやとー!?」
　そのままヘスティアとロキは喧嘩を始めると、どうすれば良いのかわからず困惑するベルとレフィーヤ。
「え、えっと・・・どうしましょう?」
「どうするって言われも・・・」
「あ!レフィーヤとベルだ!」
「あ!ティオナさん!それにアイズさんまで!」
　そんな二人にティオナが話かけた。他にもティオネやアイズもいる。どうやら夕食の時間なので三人できたようだ。
「一緒に食べよう!」
「私は良いですけど・・・ベル・クラネルもですか?」
「うん!ベルのこと知りたいし、二人もいいでしょ?」
「私は構わないわよ、アイズは?」
「いいよ、私もベルのこと知りたいから」
　二人からの承諾もあったのでベルも一緒に食べることになった。実際に話せばベルとティオナは英雄譚関連であっという間に仲良くなった。
「ねぇねぇベル、明日はダンジョン行くの?」
「はい。買った装備を試したいですし」
「それなら一緒に行こうよ」
「えっ!?良いんですか?」
「みんなで行ったほうが絶対楽しいよ?」
「馬鹿ティオナ、ベルはまだレベル1なのよ?危険だわ」

「そっかー残念だなー」
ベルの明日の予定を聞くティオナは明日のダンジョン探索に同行しようと誘うが、姉のティオネが却下する。仕方ないと思い諦めるティオナ。
結局ベルは一人でダンジョン探索に行くことになった。